

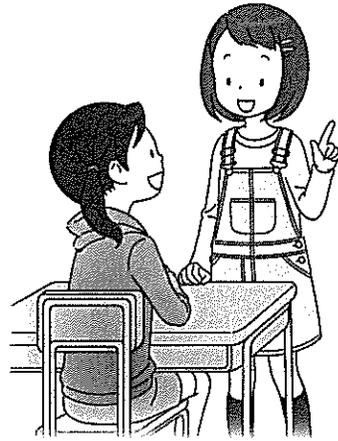
約束



けんきよな心で

携帯電話やスマートフォンけいたいの使い方が原因げんいんで、

友だちとの間に問題が起おこることがあります。そうならないよう、
わたしたちはどんなことに気をつければよいのでしょうか。



— 金曜日 夕方 —

「ねえ、日曜日、社会の宿題を調べに図書館へ行かない？」

結衣ゆいが陽菜ひなに言った。二人は、社会科の宿題で、『わたしたち
ができる環境保護かんきょうほご』について調べていた。陽菜が答えた。

「しめ切り、来週だったね。分かった。日曜日、図書館へ行こう。」

「うん。約束だよ。」



鈴木すずき 陽菜ひな

— 日曜日 朝 —

「ねえ、陽菜、今日はじゆくも休みだから、家族みんなで買い物に行かない？」

母からのさそいに心がゆれたが、結衣との約束があったので、母のさそいをことわり、約束の時間
に図書館へ行った。しかし、十分待っても、二十分待っても、結衣はあられもない。わたしは、結衣
にメールを送ったが、いつまでたっても返信がない。電話をしてみても留守番電話るすばんになった。



友だちとの約束って、
みんなにとっても大切だよ。

「いつもならすぐに返信があるのに……。来週しめ切りなのに、約束をやぶるなんてひどい。」
わたしは、夕方まで一人で調べた。

—日曜日 夜—

楽しそうに帰ってきた家族を横目に、わたしは、ますますおもしろくない気分になった。
そして、友だちと作ったインターネット上の掲示板に、結衣のことを書きこんだ。

結衣ってとってもひどいんだよ！ いっしょに図書館へ行こうって結衣から約束したのに、約束やぶるんだから！！ かなりひどい！

ひな菜

えー本当?? それって信じられない(へ)

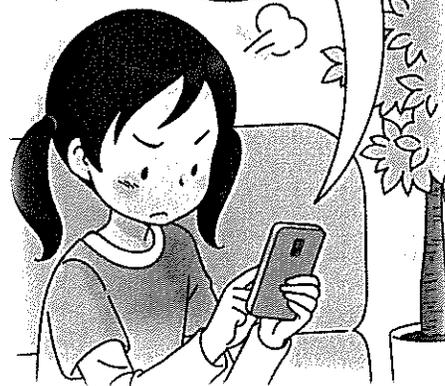
とも子

たいへんだったね (>_<)

こはる

みんなも結衣には、気をつけたほうがいいよ！

陽菜



田中 結衣

—日曜日 朝—

(今日は、陽菜と十時に待ち合わせ。ちょっと早めに出ようかな。)と、思っていたとき、母の大きな声があった。

「おばあちゃん、大丈夫？ おばあちゃん！」

かけつけてみると、祖母はたおれていて、意識がなかった。救急車で運ばれ、緊急手術が行われた。



陽菜さんは、なぜ掲示板に書きこみをしてしまったのかな。

—日曜日 夜—

手術は無事に終わり、安心したわたしは家に帰ってきた。

「もう十一時かあ。あつ、陽菜に連絡するの、わすれてた！」

あわててスマートフォンを手にしたわたしは、たくさんの着信履歴と掲示板の書きこみを見た。

「えっ？ 何これ？ なんてこんなこと書きこむの？ ひどい。」

わたしは、陽菜にメールをしようとして、その手を止めた。

（でも、陽菜に連絡をしなかったわたしも悪いな……。今日は

もうおそいし、あしたの朝いちばんにあやまるう。ちゃんと

理由を話せば、分かってくれるよね……。）そう思いながらも、

不安を感じて、なかなかねむれなかった。



そして月曜日の朝。

教室に入った結衣は、みんなの冷たい視線に気がついた。いたたまれない気持ちでいると、陽菜が登校してきた。結衣は急いで陽菜に近寄った。

「おはよう、陽菜。あのね、実は昨日……。」

「言いわけしないで！ どれくらい待ったと思うの。結衣とはもう話もしたくない。」

陽菜は強い口調で言うと、自分のつくえへ向かっていった。

（陽菜、ひどい。わたしの話も聞かないで。おばあちゃんのことでたいへんだっただから。）

結局、陽菜と結衣は一言も口をきかなくまま、下校してしまった。

陽菜が学校から帰ると、母が話しかけてきた。

「昨日、結衣ちゃんのおばあさんがたおれて、手術をした

そうよ。結衣ちゃんのご家族、たいへんだったんじゃない。」

(えっ!) 話を聞いた陽菜の心臓は、ドキドキしてきた。

「お母さん、わたし、結衣のところに行ってくる。」

そう言うと、陽菜は走って結衣の家に向かった。玄関の前に

結衣が出てくると、陽菜は思い切り頭を下げた。

「結衣、本当にごめん。昨日、結衣がおばあさんのことで

たいへんだったって聞いたわ。わたし、自分勝手すぎた。

それに掲示板にも……。本当にごめんなさい。」

なみだを流しながら何度もあやまる陽菜に、結衣はやさしく

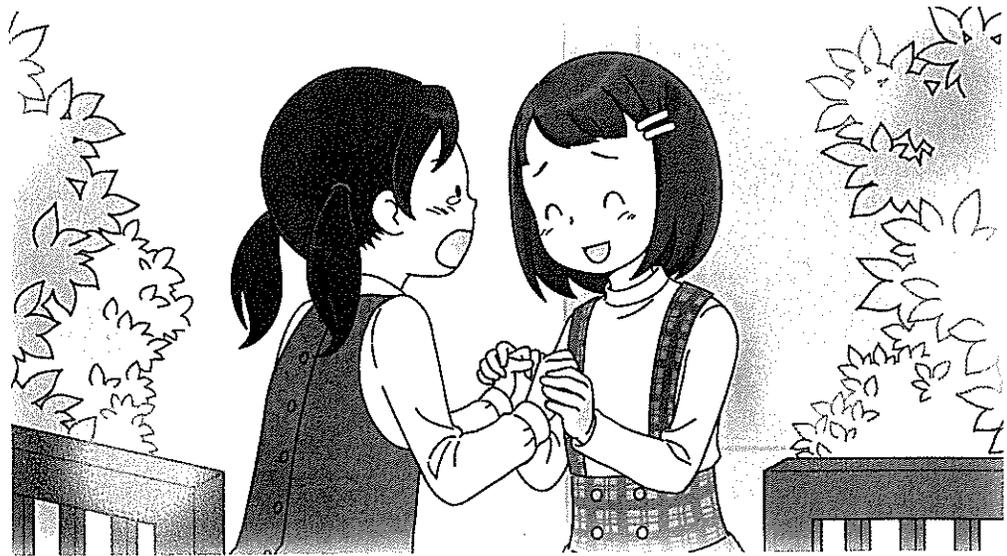
声をかけた。

「うん、分かった。もういいよ。わたしも連絡できなくて

ごめんね。また仲よくしようね。」

「ありがとう。みんなのごかいは、必ずわたしがとくからね。」

●編集委員会 作



15

10

5



相手のことをみとめて受けいれ、

よりよい関係をつくるためには、

どのようなことが必要か、まとめまじよう。



携帯電話やスマートフォンを利用した、

インターネットの正しい使い方について、

家族と話し合いまじよう。



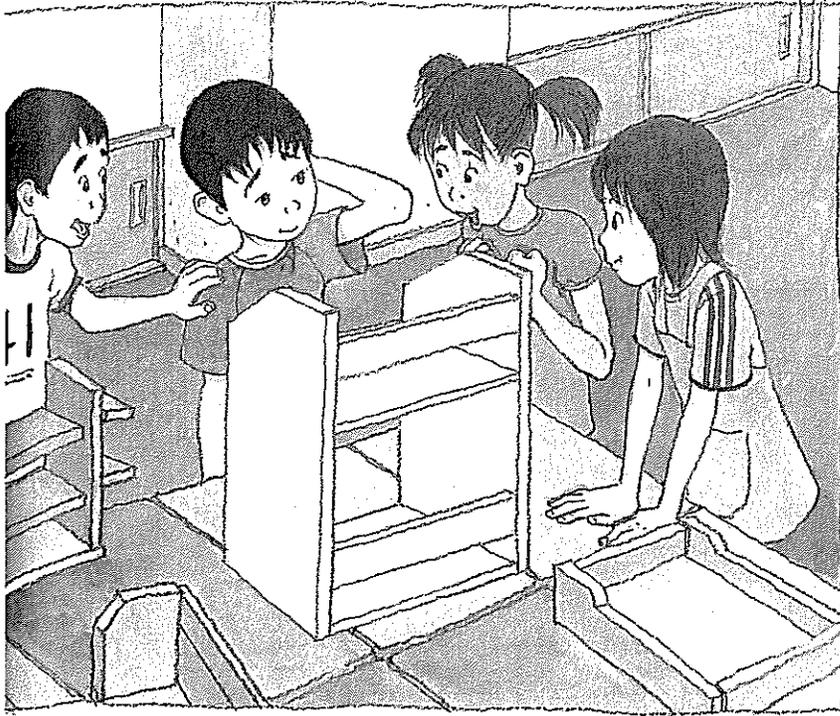
結衣さんが、「もういいよ。」と言ったのは、
どうしてかな。

森川君のうわさ



かたよらない心

うわさを信じて、友達をきずつけてしまったことはありませんか。



「上手だね、この本立て。」

「わたし、森川君を見直しちゃった。」

「ニスまでぬってあるんだね。」

「作品展が終わったら、わたしに出来ないかしら。」

夏休みの作品展のときのことだ。みんなは、森川君が作った本立ての前で、森川君を口々にほめた。工作が苦手なぼくは、森川君がうらやましかった。

森川君は、ほめられてうれしそうだった。



作品展さくひんてんがあった二、三日後、ぼくは、学校の

帰りに、石山君たちといっしょになった。

「森川君もりかわの作った本立てを覚えてるかい。」

「うん、上手だったね。」

「あれは、本当は、森川君のお父さんが作ったんだって。」

5

「本当？ そういえば、森川君のお父さんは大工さんだったよね。」

石山君たちがふんがいして話すのを聞きながら、ぼくは変だなど思った。以前、ぼくは森川君の家へわずれ物をとどけたことがあった。森川君は、犬小屋にペンキをぬっていて、

「けっこう上手だろ。これ、ぼくが最初から一人で作ったんだよ。」

と、得意そうだった。そのとき、ぼくは、森川君は器用なんだなと思ったのだ。

だから、「それはちがう。」と言おうと思った。でも、言い争いになったらめんどうだと思ったので、だまっていた。

10

「森川君の本立ては、家の人を手伝ったものだ。」といううわさは、やがてクラス中に広がってしまった。しかし、みんなの関心は、近づいてきた運動会に向いていき、そのうわさは、いつの間にかわすれられていった。

15

そのまま何も起きなければよかったのだけれど……。

「ぼく」は、なぜ、「それはちがう。」と言えなかったのかな。



三学期になって、ぼくたちは卒業記念のオルゴールを作り始めた。図工の時間だけでは間に合わず、家でやってくることになった。

次の週の図工の時間、みんなは、森川君のオルゴールのふたのちょうこくのできばえに感心した。細かい花もよう、ほり方も上手で、まるでデパートで売っているオルゴールのようだった。

あのうわさが、またささやかれ始めた。みんなは、だんだん森川君を仲間外れにするようになった。

「おはよう。」

ある朝、森川君が元気よく教室に入ってきて、石山君^{いしやま}たちに声をかけた。すると、今まで話していた石山君たちは話をやめ、ピイツと横を向いてしまった。

いつも明るかった森川君も、だんだん無口になっていった。

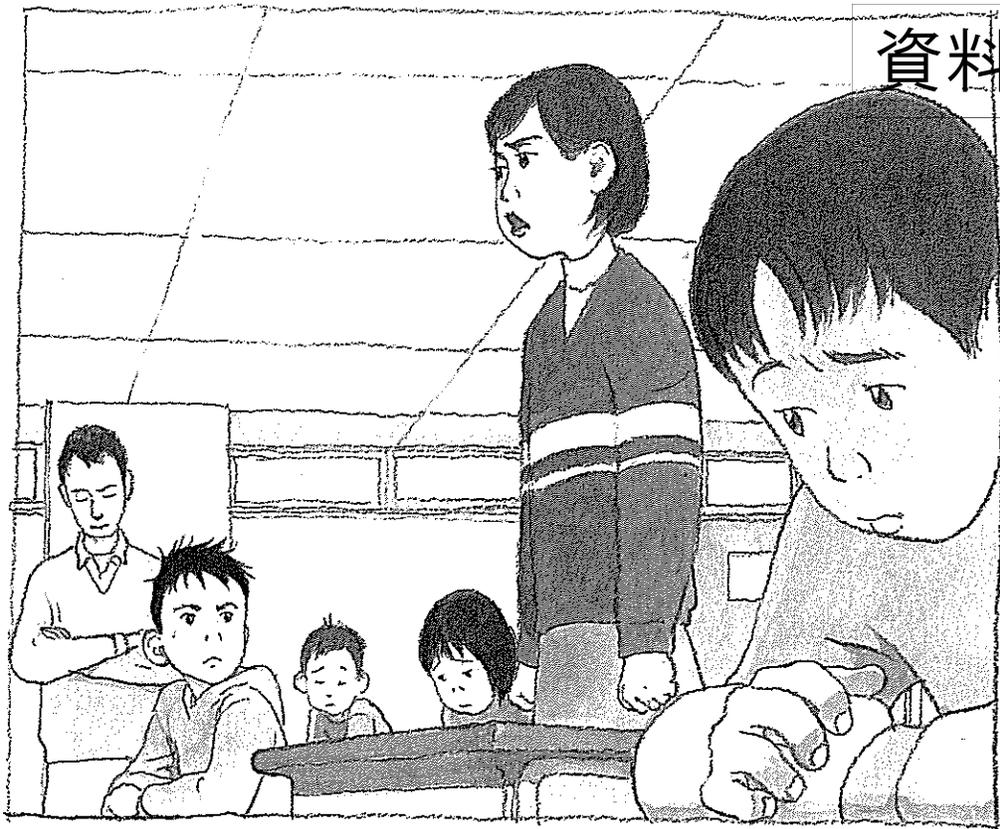
ぼくはこまってしまった。あるとき、石山君たちの話に対して、「それはちがう。」とはつきり言えば、うわさは広がらなかつたかもしれないのだ。今は、もう言い出せない。ぼくは、気が弱い自分を責めた。でも、心のすみには、「早く三学期が終わればいいな。」という、ずるい気持ちもあった。

そんなある日の帰りの会で、いつもはおとなしい順子^{じゅんこ}さんが、めずらしく手を挙げて、森川君のことを話し始めた。

「わたしの家は、森川君の家の近くです。わたしは、森川君が、休みの日に庭で何か作っているのを、よく見かけました。森川君は器用なんです。」

もりかわ
森川君が無口になっていったのを見て、「ぼく」はどんなことを考えましたか。





自分が発言しているわけでもないのに、ぼくは、真っ赤になった。ずるかった自分がはずかしかった。順子はつこさんはりっぱだと思った。

「本立もりかわてだって、オルゴールだって、わたしは、森川君が一人で作ったのだと思います。先生は、『どんなことでも、確かめずにうのみにしてはいけません。』とよくおっしゃいます。それは、『うわさで人を判断してはいけません。』ということにも通じると思います。確かめもしないで、森川君を仲間外れにするなんて……。」

順子さんの落ち着いた声を聞きながら、ぼくは、森川君の気持ちを想像した。そして、順子さんの発言が終わったら、ぼくも発言しなくてはいけない、と思った。

●編集委員会作

15

10

5



いじめのないクラスにするためには、どんな心が大切か考えましょう。



いじめのないクラスにするために、どんなことを心がけたり実行したりすればよいか、話し合いましょう。



「ぼくも発言しなくてはいけない」と思ったのは、どうしてかな。